

教えて! ドクター Q&A

Q 吸入ステロイド薬が効きにくい喘息があると聞きました。教えてください。

A 1990年代以降の吸入ステロイドをはじめとする治療薬の普及により、気管支喘息（以下喘息）による死亡は大幅に減少している一方で、喘息患者の約5%に存在する治療抵抗性の難治性喘息が近年問題となつてきています。

喘息は「気道の慢性炎症」によりさまざまな呼吸器症状を呈する疾患であり、最近の病態理解の進歩により、この慢性炎症は2型炎症症と非2型炎症症からなり、2型炎症症は後天的に獲

得される2型ヘルパーT細胞（Th2細胞）と生まれつきある2型自然リンパ球（ILC2）、好酸球や好塩基球などの白血球の相互作用から起こることがわかってきています。2型炎症症は、外部からの刺激で気道上皮を介してTh2細胞とILC2が活性化されると、インターロイキン（IL）4、IL5、IL13と呼ばれる物質を放出し、気道に直接作用したり、炎症に関係する細胞を活性化したりして気道炎症を引き起こします。非2型炎症症は好中球性炎症症が中心的な役割を果たしているときれています。

臨床像としては、2型炎症症はアレルギー性、好酸球性喘息、非2型炎症症は好中球性喘息を起していると考えられます。2型炎症症のなかでもILC2によるものと非2型炎症症は吸入ステロイドが効きにくいため、コントロール不十分な難治性喘息となりやすいことが近

年の研究であきらかとなり、ステロイド抵抗性の難治性喘息に対してインターロイキンなどの炎症物質を標的とした生物学的製剤など新しい治療法も最近登場してきています。また、非2型炎症症にはマクロライド系の抗細菌薬の併用も考慮されています。

治療に直結する2型炎症症を中心とした病態が明らかになり、今後、さらなる喘息の診断・治療法の向上、日常診療への定着につながることを期待されます。

神戸大学医学博士。日本循環器学会循環器専門医。神戸大学病院や民間病院で20年以上多数の心臓ペースメーカーやカテーテル手術をはじめ、生活習慣病や人工透析にも携わる。現在は、専門分野である循環器・呼吸器疾患を中心に、地域のかかりつけ医として幅広い年齢の患者様を診療する。



北村内科クリニック
理事長 北村 秀綱